

## あなただけの物語

「この子はどうも耳が聞こえないようだよ」大婆さまがすやすやと眠っている赤ん坊を見つめながらそう言った。周りにいる大人たちは一斉に肩を落とした。そうか、それはきつとこの先大変だ。彼らの顔にはそう書いてあるようだった。大婆さまは「大人がそういう暗い顔をするんじゃないよ。もし本当にこの子の耳が三歳になっても聞こえないままだったら、もう一度ワシのところへ連れておいで」そう言うと、まじないだろうか懐紙に包まれた朱色の顔料を指にとって、赤ん坊のおでこに印を付けた。

赤ん坊が三歳になった時、彼女の耳は聞こえないままだった。それでもニコニコとよく笑う子で、自分の耳が聞こえないこと、周りとは違うことに気づいていないようだった。大人たちは「これでは嫁にも行けんだろうなあ、かわいそうになあ」そう言いながら大婆さまの元へ彼女を連れて行った。

「よく来たね」大婆さまはその皺だらけの顔を笑顔でいっばいにして女の子を受け入れた。女の子はよく食べ、よく遊び、そして大婆さまの言うことをよく聞いた。大婆さまが彼女とどんな風に会話していたのかはわからない。だが、女の子には大婆さまの言うことが全てわかっているようだったし、大婆さまも彼女に何か伝えるのに不自由していないようだった。彼女はそんな風になっすぐに健やかに育った。

女の子が十五歳になった時、彼女の美しさに目をつけた豪農の息子が彼女を妾に欲しいと、そう言ってきた。大婆さまは「ワシの目の黒いうちはそんなことは絶対にさせん！」そうピシヤリと言うと、その申し出を跳ね除けた。

「お前の耳が聞こえないのは弱さではないのに、弱さのようにしてつけ込んでくる奴らがいる。それはババが死んでもずっと続く。だからお前は賢く、そして耳を澄ましているんだよ」

女の子は自分が弱いと思ったことはこれまで一度もなかった。だがその出来事があったから、自分が本当は弱く、大婆さまに守られていただけだったのではないか？ そんな風に思った。そして、来る日も来る日も庭を眺めては、そこに遊びに来る鳥たちを見つめた。彼らは彼女の蒔いた餌をついばんだり、水浴びをしたり、時には近くまでやってきて、首を傾げては黒いつぶらな瞳で彼女のことを見つめた。彼らの声を聞いてみたいな、女の子は初めてそう思った。

数日後、大婆さまが亡くなった。その日は春の嵐のような日で、雷鳴が一日鳴り響いていた。女の子はその雷鳴をしっかりと体で感じ取っていた。涙は出なかった。まるで彼女の代わりに泣いているような雨を見つめていると、大きな衝撃と共に庭の木に雷が落ちた。そして、彼女の中でずっと続いていた静寂が終わった。雨が止み、隠れていた鳥たちがどこからともなく戻ってきて、鳴き始めた。彼らは大婆さまの死を一緒に悲しんでくれていた。

「お前は賢く、そして耳を澄ましているんだよ」大婆さまの声が聞こえた。

(おわり)